



おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビューの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士(MBA)、新潟郷土史研究会会員
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（桓文社）
「郷土とことわざ」（人間の科学新社・共著）等

「はんばぎぬぎ」

「はんばぎぬぎ」ということばをご存知でしょうか？
県内各地の主に山間部で古くから使われてきた「旅から帰って行く反省会、慰労会」を表すことばです。地域によっては「はんばぎのぎ」「はばきぬぎ」とも発音されています。

「はんばぎは『飯場着』と書くんだて、旅先では食事のときでも何でもよそ行きを身に着けていた、それを無事帰って脱げば、やれやれお疲れさんということからこういったんさね」という人もあります。なるほど、と思ってしまう説ですが、これはマンパチ（ウソ）。

「はんばぎ」とは、その昔、旅人が脛（すね）に巻き付けた脛当て「脛巾」（ハバキン）が、越後弁風に(?) 転化・濁音化して「ハンバキ」「ハンバギ」になったものとされています。昔の旅は、費用も時間も労力もかかる上、場合によっては難所・災難といった危険と隣り合わせの命懸け。そこから帰郷とあれば、「はんばぎ」を脱いだ慰労会は無事を祝うと同時に、近隣や家族に土産話を披露する大切な催事であったことでしょう。

という説明で終わってしまったのは、単なる新潟弁解説講座、実はこの「はんばぎぬぎ」が、言語的・民俗学的に我が新潟の風土を知る上でも興味深いことばなのです。かつてマタギの里として知られていた県内の秘境奥三面ともつながりがあるとも思われてくるのです。

現村上市に合併された旧岩船郡の奥三面地域は、昭和60年（1985）電源開発で集団移転した経緯がありますが、それだけに集落の人たちの結びつきは固く、数々の土地のことばがみられました。そのなかの、マタギた

ちの符牒でもあった「山ことば」と「装束語」を何気なく見ていたら、「はんばき」ということばを発見！「はんばき」は「はんばき」とも称されたマタギの肘当て。麻で織った布を筒状にして縫った獵着です。マタギは北海道から東北及び隣接する本県の実山奥で獵をする人を指しますが、秋田のことばにもマタギの装束に「はんばき」がみられるのも何やら関わりがあるようです。

一方、旅人が身に付けた「はんばぎ」は、その昔は藁や木の皮でできていたものでしたが、それが時代と共に布製になって「脚絆（きゃはん）」と呼ばれるようになりました。お椀にお箸、猫にマタタビ、酒には肴、ワインにチーズというように、脚絆^{てっこう}といえ、^{きゃはん}「手甲・脚絆」でワンセット！マタギの肘当て「はんばき」が「手甲」なら、旅人の膝当て「脚絆」はどちらも身につけて緊張、外せばらくり・じょんのびの感があります。

そもそも「はばきん」転じて「はばき」という語は、北は下北（青森県）から南は関西まで点在している土地ことばです。一方、これを脱いで慰労会をする意の「はばきぬぎ（ぎ）」「はんばぎぬぎ」は新潟から北は青森、岩手、秋田、そして西は富山の北陸地方山間部に点在していて、当時の人の往来やことばの伝播がみえてくるようです。厳しい気象や地形、風土のなかで育まれた慣習「はんばぎぬぎ」は交流の場と情報提供の場でもあったのです。

※「はんばき」「はんばぎぬぎ」には発音・由来等諸説ありますが、本稿は筆者の調査と『全国方言辞典』（東條編）によるものとしました。

